

概至細川入道挑戦の事、和親の道  
に達するを以て、和使を福りり、和  
平を以て、後親正を野山より入りて  
眾を圍束り、海より因き、九月、龍安  
——て、退居の事あり。家譜

備後守、辰原一正おのむねは、雅樂改親正ちのむね  
長男に——て、侍——あり、  
天正十九年、従五位中に叙——  
備後守に任じ、文禄元年、父親正  
と共々、朝鮮に渡海——、慶長  
二年にも、再び渡海——て、南原城  
を攻落し、因き、五年、園原の役あり、  
建昭宮に去り、ひまわりて、軍功

ありしうの国きく六年丁父の申願  
 積波一國を揚りり十七万八千八百石  
 餘を願き同き七年丁國地を  
 城を廢して高松城に移る國さ  
 十八年三月十八日又十六歳に  
 丁年せり  
一西の孫を改まる高松寛永十七年  
 七月故ありて願國を没收せしむ  
 出羽國田理郡の飛流せしれ被地を石りて一百万石を  
 揚りて百万石三年三月揚子石門を清三男授け申を  
 石りて又の飛所料一百万石を八月八千石  
 在る清に揚りて二千石を後代に揚りて

一生駒三右一正天正五年丁二月紀別難  
 に後向のとき伯父生駒重九郎門尉と  
 同く武名をあらわす家譜  
 一生駒積波一正天長二年二月廿一日  
 羽前國に渡り第七番に備ふ一組  
 七千二百人蜂瀬智防波も家改三千  
 七百人生駒積波も一正千二百人昭坂  
 中勢も備每治合せし一百万百人

昌原より少所より立陣せしと事々に  
漢南の大軍ありしり河野在京ちま  
在城蔚山を圍むのとき後卷し  
了漢南人を教多討捕り又南原  
城在京あり同上

一慶長五年

神祖石田三成等運使在退治と  
し上言に向せたまふべきに

定り諸將口を陣より先立てて散向し  
七月晦日生駒備後守一正將酒原  
阿波守を獲ちも諸將より後陣  
よりきり及びてあ人の又生駒雅樂  
次親政城原家政入道蓬庵右板  
にありて織院に告みせしり同  
よりより至鎮一政は暫く園來  
より角如泣ひり喜多在京免御正

戸門此後も違ふもゆへに字喜多  
秀家の位おれい秀家より通するも  
ことごとく難きはうり同く角め  
たまふへいしと定まる物もに増減  
蓬庵生駒親正より名子玉鎮  
一正二人へ職位より譲りしめ  
やむことを得き一旦彼位より其  
を在りしとくとも

月府君より對し異心ありしを後  
正以下告く二人是を名奉り字喜  
多戸川も異心ありしを切に  
後いせむにうり許容ありて名  
松書正献し字喜多は板崎出陣  
と改名しともは是日小正を殺す

大正川志

一 長又年景備四陣のとき信長

一 正子息正俊を伴ひ

東照宮に従ひ甲子同年八月宿  
三成叛逆のとき中野國中より  
四馬より先立ち田中玄那が旗を政  
友重信渡り高虎と相討に中  
細言秀信より早城を攻め同き  
其百江戸門を海りて其百早城  
正系殿より屏刻江戸へ退進して

九人一書の四書を編ぶ家譜

一生駒一正は性質鋭敏なり其  
父親正是正忠みそ長又年九月  
其に玄信二十騎難え三百除を授け  
田中玄政の部より属せしむ一正  
園原戦より當りて最後の指揮甚  
其機よ意より孫平能戦し其を  
徳政孫右衛門年六十三猶先より進ん

了首正降し了りて除害因久六若濃  
四所左衛門右衛門等より戦ふ

大三川志  
石卯餘史

一 生駒一正は平生隠れあきく柄あり  
物違へども合戦のときには除了中  
知するるときは柄らるるしりて其  
言語分明あり元来忠愚あも質に  
了父雅樂政も憎みかしく因縁

の役には僅のまを添て向りむ  
志うも心に操割勇あもゆへに  
に了熱切を立たり

國朝大業歴記

一 了父長又年の復

徳川殿勇の倉津よむうりせ給ふ  
きく備後お一正は位にそりひける  
所よと方にもまゝ軍起りて一正  
う父雅樂政親正はた板の役候よ

あつてひ丹後國のむすこ一ふり  
りり東國のありて

徳川殿の味方にくみまらせ  
けねい海道のうまひけりて  
國の勅ふ世年天中こころ  
徳川殿のあつてひまらせ  
勅賞とて一西の徳波國を  
りりて又雅樂改親正事なと

流ふに及びて 藩幹譜

一 長十三年一正書 振直門 督女 始めて國  
東より中向

將軍家江満長の上徳公役の半  
正年よりこの行幕市を福 長十  
四年五月

あり 家譜